No more than 類の意味を perspective の違いから考える

―認知言語学を参照した英語学習支援法の観点から―

A Consideration of the Meanings of Such Expressions as *no more than* Based on the Concept of "Perspective":

From the Viewpoints of Referring to Cognitive Linguistics for English Learning and Teaching

今井　隆夫
愛知みずほ大学人間科学部心身健康科学科

Takao IMAI
Division of Human Sciences, Department of Human Sciences, Aichi Mizuho College

Whoever studied English to pass the entrance examinations to universities may have trouble memorizing the differences in meaning between *no more than, no less than, not more than,* and *not less than*. This paper is going to give the author's ideas to help learners understand and memorize those expressions more efficiently without depending on the Japanese equivalents for those expressions. That is because the author's own learning and teaching experiences have led him to believe that English cannot necessarily be translated into Japanese and vice versa, and translation can even prevents learners from understanding the actual meanings or images of English expressions. If learners learn these expressions not based on translation, but on the images of the constructions, it is hoped that they will be able to understand and produce the expressions more dynamically in context. This paper will explain the meaning of such expressions as *no more than, no less than, not more than, not less than* by referring to the concept of "perspective," one of the concepts of Cognitive Linguistic. In relation to these expressions, the expression which is often called "*Kujira-Koubun"* (the *Whale*-Construction) will also be explained from the concept of perception. This explanation will help learners understand the actual images of the *Whale*-Construction and they will understand the meaning of the construction according to context without the help of the fixed Japanese equivalent that most high school students were told to memorize. Together with the explanations given by the author, native speakers' feedback on the language expressions will also be introduced and considered.

キーワード：視点の違い、認知言語学、*no more than*
Keywords: perspective, cognitive linguistics, *no more than*

1. はじめに

先日、ある学生から、*no more than, no less than, not more than, not less than* の違いについて質問を受け、学生に説明していた折に、これらの 4 つの表現の意味の違いと、受験英語では、「クジラ構文」と呼ばれて、公式的な丸暗記がされる表現について認知言語学の視点を参照した考えが纏まった。まさに、Teaching is learning.と言われることであるが、良い質問を受けると、自らは subconscious レベルで理解していることを conscious なレベルに言語化することが可能になり、教授方法の開発にもつながる。教えることで、良い考えがまとまり、自らも学ぶことができると再認識できた。

これらの文法項目は、多くの高校生が受験勉強でその意味の違いを覚えるのに苦労する項目の１つでもある。例文(1)をみてみよう。

(1) (a) *No more than 10 customers were in the coffee shop.*
(b) *No less than 10 customers were in the coffee shop.*

(1)(a)は、「珈琲屋には、お客さんが 10 人しかいなかった」という意味であるのに対し、(1)(b)は、「珈琲屋には、お客さんが 10 人もいた」という意味である。この構文の意味を理解する際に、no と less はマイナスイメージ、more はプラスイメージと考え、*no more than* は、〔－（no)〕×〔＋（more)〕＝〔－〕 となるので全体ではマイナスイメージ。 *no less than* は、〔－（no)〕×〔 －（less)〕＝〔＋〕 となるので、プラスイメージといった動機付け[1]を見出しながら、訳語との関連で暗記されることが多く行われているようである。しかし、この方法は、表層的な英語と日本語の対応関係を丸暗記したにすぎず、この表現に出会うたびに必ず日本語訳を介さなければならないという問題点があり、これらの表現を深層的に理解し、さまざまな文脈で productive に使用できる域には至らないと考えられる。

そこで本小論では、*no more than, no less than, not more than, not less than* 及び、いわゆる鯨構文と呼ばれる表現（*A whale is no more a fish than a horse is.*）について、認知言語学の道具立ての１つ、perspective の違いの観点から、表層的な訳語による学習から解放され、これらの表現をより深層的に理解し[2]、さまざまな context で dynamic に理解・表出することが可能になる学習支援法の一つを提案してみたい。なぜなら、筆者は、自分自身の学習及び教授経験から、「日本語は英語には訳せない。訳すからわからなくなることが多い。訳すことは、学習者の理解を妨げることさえある」と考えているので、訳語ではなく、イメージで英語表現が表わす内容を理解できる学習支援法を追求しているからである[3]。本研究もその枠組みの中に位置づけられる１つの事例研究としての小論である。

---

[1] 認知文法の専門用語「動機付けられている」（motivated）である。ある表現がなぜそのように表現されるか、そのような意味になるかの理由説明ができることを意味し、反対の概念は恣意性（arbitrary）、たまたまそうなっていて、理由はない、である。

[2] 認知言語学的な視点を参照して、言語に部分的でもなぜある表現がそのような表現になっているかという動機づけを与えることは、記憶しやすく、かつ、長く記憶に残るということは、Littlemore(2009: 148)の記述にも支持される。Littlemore の記述は、次の通りである。 “This engages learners in a search for meaning, which is likely to involve deeper cognitive processing which, according to Craik and Lockhart (1982), leads to deeper learning and longer retention.”（下線は筆者による）

[3] この点については、今井（2010）に詳しい。

2. perspective の違いと意味解釈

ここでは、今回道具立てとして使う認知言語学の概念の一つ、perspective（視点の違い）、について簡単に整理することから始めたい。perspective という認知言語学の道具立てから説明できる言語現象・文法現象は多くあり、この視点からの理解が英語学習支援になると思われるものも多い。次の例（2）を見てみよう。

(2) (a) *Jack bought a computer from Nina for a good price.*
(b) *Nina sold a computer to Jack for a good price.*

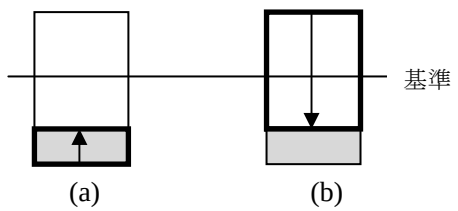
これは、Lee（2011: 3）に倣って、筆者が作文した例である。(2)(a)と(2)(b)では、*for a good price* という同じ表現が用いられているが、この「良い値で」という literal な意味（字面の意味）を表わす表現が、どのような perspective から捉えられるかによって、意味解釈が変わる例である。(2)(a)では、買い手である Jack の視点から *for a good price* という事態が捉えられているので、期待よりも安く（at a lower price）買ったという意味で解釈されるのに対し、(2)(b)では、売り手である Nina の視点から *for a good price* という事態が捉えられているので、期待より高く（at a higher price）売ったという意味で解釈される。*for a good price* と言っても、誰にとって good であるかという広い意味では文脈(context)、より specific には perspective を加味しないと、*for a good price* の意味は確定できないわけである。例えば、Jack が Nina からコンピュータを 50,000 円で買うつもりが、実際は、30,000 円で買うことができた場合は、(2)(a)のように述べることができる。一方、Nina が Jack にコンピュータを 30,000 円で売るつもりが、40,000 円で買ってもらえた場合、(2)(b)のように表現できる。このように、期待していた値段にという perspective を加味しないと、for a good price の意味は決まらないのである。

すべの言語表現は参照点（reference point）[4]にすぎないので、ある言語表現の意味を理解するには、文脈が大切（Context counts.）と言われるが、文脈の手がかりをどのように利用するかのより specific な説明の 1 つとして、perspective という概念は英語学習支援に有益であると考えられる。

また、perspective の違いは、図と地の分化・反転という現象で説明するとよりわかりやすい場合もある。例えば、次の例文（3）を見てみよう。a little と little は、単に a little は「少し」、little は「ほとんどない」という訳語を覚えるだけの場合が多いようであるが、客観的な事態は同じであるが、それを人がどのように捉えているかが異なる表現であることに目を向けさせることで、quite a little = much という意味を表わすことまでもがすっきりと理解できることが期待できる。

(3) (a) *There is **a little** wine in the bottle.*
(b) *There is **little** wine in the bottle.*

【図 1 ：a little と little のイメージ】



[4] reference point（参照点）は認知言語学の重要概念の一つで、Langacker によって提唱されたものである。あるものを手掛かりに別のあるものを連想・想起する場合の手掛かり。このような意味で、筆者は、すべての言語表現は、相手のメッセージを理解するための参照点であると考えている。

いずれもワインの量に関する記述であり、客観的には同じ量あると考えられるが、その同じ量のワインを、(a)では、「少しある」と「ある」という面をハイライトしてプラスのイメージで捉えているのに対し、(b)では「ほとんどない」と「ない」という面をハイライトしてマイナスのイメージで捉えている。上の図で示されるように、図となって認知される部分（太線で囲まれた部分）が(a)と(b)のそれぞれでは反転しているのである。また、(a)では、基準値に対しては、wine の量は少ないが、図の矢印で示させるように、その量を「ある」というプラスの perspective で見ているのに対し、(b)では、同じく、基準値に満たない wine をここまでないという、マイナスの perspective で見ていると考えられる。ちなみに、quite a little, quite a few などの表現が、「かない多い」という意味で解釈されることを不思議に思う英語学習者は多いようであるが、この点も、上の図のように little と a little では事態の中でハイライトされる部分が違うことを理解すれば、容易に解決するのではないかと思われる。つまり、a few や a little は「少数ある」「少量ある」という意味で、「ある」という面がハイライトされた語であるから、その前に程度が大きいことを表す quite (= to a large degree[5])が置かれているので、A little each day adds up to a lot.や「塵も積もれば山となる」といったイメージから、「少し」がたくさん集まって「多く」になると考えると整合性が取れるのではないか。

3. no more than 類の意味解釈

では次に、no more than 類の意味解釈の方法を、認知言語学を参照した英語学習支援という立場から述べてみたい。先ほど挙げた例文(1)をもう一度みてみよう。

(1) (a) *No more than 10 customers were in the coffee shop.*
(b) *No less than 10 customers were in the coffee shop.*

まず、*more than 10 customers* という表現に関連して、次の例文(4)(a)～(d)を考えてみよう。

(4) (a) *More than 10 customers were in the coffee shop.*
(b) ***Far*** *more than 10 customers were in the coffee shop.*
(c) ***A little*** *more than 10 customers were in the coffee shop.*
(d) ***No*** *more than 10 customers were in the coffee shop.*

ここで注目したいのは、*more than* の前に置かれている表現である。(4)(b)(c)(d)ではそれぞれ、*far, a little, no* という表現が置かれているが、比較級の前に置かれる表現は、差を表すものである。例えば、次の例を(5)をみてみよう。

(5) *There were **5** more students in the classroom than I had expected.*

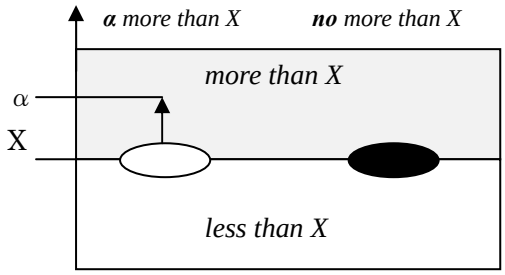
「予想よりも 5 名多くの学生が教室にいた」という意味の文であるが、予想した数との差が 5 であるとこを表わす文である。比較級の前に置かれる数は、差を表わすことがわかる。では、例文(4)に話を戻そう。

いずれも、珈琲屋にいるお客さんの数が、10 人よりも多いという perspective（または、フレーム）で述べている表現であるが、その数と 10 人との差が、(4)(b)では「はるかに多く」（far）、(4)(c)では「少し多く」（a little）、(4)(d)では「ゼ

[5] *Cambridge Dictionary of American English* (2000)による。

ロだけ多い」（no）ということである。つまり、問題の(4)(d)[=(1)(a)]の表現は、10 人よりもお客さんの数が多いということを予測した perspective から事態を捉えているが、その数は、結果として 10 人であったので、多いのではないかという perspective からは、10 人が少ない数と感じられる表現になると言えよう。（*cf.* 図２）

【図２：no more than のイメージ】

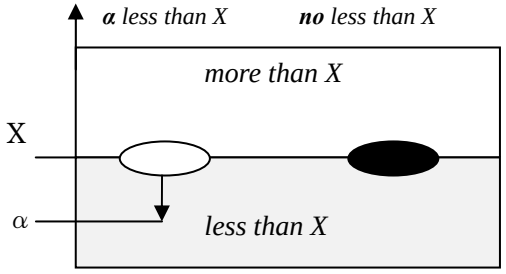


➔ *no more than X*（図の●）は、Ｘよりも多いという視点（perspective / frame）＜図でハイライトされた部分＞からＸという数を判断しているので、「X しかない」という X を少ないと捉えるイメージになる。図の○は、α *more than X* を表わす。（α には任意の数が入る）（なお、図の○はＸを含まないことを、●はＸを含むことを示す。（以下の図でも同様）

一方で、(1)(b)では、more than の部分に less than が用いられているので、これは、珈琲屋にいるお客さんの数が、10 人よりも少ないというフレームで述べている表現となる。よって、同じ 10 人という数が、もっと少ないだろうという perspective のフレームで捉えられたため、少ないだろうという perspective から 10 人を見れば、10 人が多いものと感じられるのである。（*cf.* 図３）

この考え方は、さらには、次のような受験英語では、クジラ構文（*A whale is no more a fish than a horse is.*）と呼ばれる構成体[6]にも応用できる。

【図３：*no less than* のイメージ】



➔ *no less than X*（図の●）は、Ｘよりも少ないという視点（perspective / frame）＜図でハイライトされた部分＞からＸという数を判断しているので、「X もある」という X を多いと捉えるイメージになる。図の○は、α *less than X* を表わす。（α には任意の数が入る）

(6) (a) *Giving birth at home is* ***no more dangerous than*** *being in hospital, a major new study has found.*

(b) *Marijuana is* ***no more harmful than*** *tobacco and alcohol.*

(c) *Twitter and Facebook are* ***no less addictive than*** *tobacco and alcohol.*

(d) *Few would maintain that language in struction is easy. Nor can the advice of*

[6] Constructions に対する山梨（2009）の訳語である。通例、「構文」という訳語が使われることが多いが、構成体の方が、より誤解が少ないと感じるのこの用語を用いた。なぜなら、Constructions には、さまざまなサイズと抽象度のものがあるが、日本の英語教育では、「構文」という用語を文レベルにのみ用いることが多くある。その「構文」と誤解されないように、構成体を用いる方が望ましいと考える。

linguists always be counted on to make it any easier. Unless they are themselves experienced language teachers, the advice of linguists on language pedagogy is likely to be of ***no more practical value than*** *the advice of theoretical physicists on how to teach pole vaulting.* …中略 *It remains to be seen whether language teaching will fare any better when guided by notions from cognitive linguistics. There are, however, grounds for being optimistic.*
(Langacker 2008: 66)

(6)(a)(b)はインターネット上から *more than X* して見つけた文、(6)(c)はオリジナル、(6)(d)は言語学の論文からである。(6)(a)では、*more dangerous than* という表現が用いられていることから、病院での出産より家での出産の方が危険であるという参照枠（frame of reference）を立ち上げ、その危険度の差が no（ゼロ）であると述べているので、思っているより危険でないというイメージの文になる。授業で説明する場合は、よりわかりやすく、「皆さんは、家で出産することは、病院で出産することよりも危険である（*more dangerous than*）と思っているでしょうが、実のところ、それらの危険な度合いの差はゼロ（*no*）なんですよ」という感じで説明してはどうか？ *Giving birth at home is* ***more dangerous than*** *being in hospital.* という perspective から、実際は、家で出産することの危険さは、病院で出産することの危険さと差はないという事態を見ている表現である。(6)(b)も同様で、*more harmful than* という表現から、タバコやアルコールよりもマリワナは危険であるという参照枠を立ち上げ、その危険な度合いの差は no（ゼロ）と述べている。つまり、この文のイメージは、「皆さんは、タバコやアルコールよりもマリワナは危険と思われているが、その危険な程度は同じなんですよ。」という感じである。(c)では、*less than* が用いられているので、そのイメージは、「皆さん、Twitter や FaceBook は中毒性がタバコやアルコールほどない（less addictive than）と思われていますが、実は、その中毒性は同じなんですよと」いうイメージの文である。

クジラ構文の公式では、「クジラが魚でないのは、馬が魚でないのと同じ」と no more ~ than の場合は、than 以下を否定で訳すような公式化した説明がよくされるようであるが、than 以下が否定か肯定かは、この構文が決めていることではなく、frame 知識にアクセスした結果わかることである。これも言語表現が参照点にすぎず、すべては言語化できないことを考えれば納得がいくであろう。クジラ構文の場合は、「クジラの魚度合いは、馬の魚度合いと比べた場合、普通の人は、クジラの方が、馬よりも魚らしいと思うでしょうが、実はその差はゼロなんですよ」と言っているだけで、馬の魚度合い（魚らしさ）がゼロというのは、frame 知識からわかることである。となれば、(b)の文は ambiguous である。「マリワナの有害度は、たばこやアルコールより高いと皆さん思っているでしょうが、その有害度は同じである」というのが文字通りの意味で、タバコやアルコールが危険と思っている人には、どちらも同様に危険という解釈になり、タバコやアルコールをそれほど危険と思っていない人には、マリワナも思っているほど危険でないとう解釈もあり得ることになる。ある母語話者の意見では、普通は、前者の解釈が普通ということである。しかし、どちらが普通の解釈であるかは、frame 知識、背景知識、文脈や文化的知識（cultural literacy）などの関数として決まることであり、言語表現だけでは決まらないことを考えれば、すべての言語表現には、ambiguity は残されているとも言える。

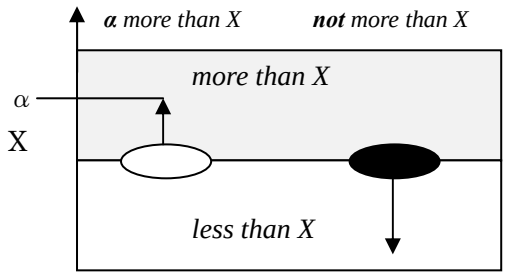
最後に、(d)は、認知言語学の専門書からの引用であるが、下線部のメッセージは、「言語学者

の言語教育に対する助言と理論物理学者の棒高跳びの仕方に対する助言を比べた場合、前者が後者よりも実用的な価値はある（*more practical value than*）と皆さんは思われているでしょうが、実は、その実用的な価値の差はゼロである」というイメージの文である。つまり、言語学者の言語教育についての助言は、理論物理学者の棒高跳びの仕方についての助言と同じく、実用的な価値はないというメッセージを伝えていることになる。

では次に、*no more than* の no の位置に not が置かれた表現を考えてみよう。こちらも、高校生が覚えるのに苦労する表現の一つである。

(7) (a) *Not more than 10 customers were at the coffee shop.*
(b) *Not less than 10 customers were at the coffee shop.*

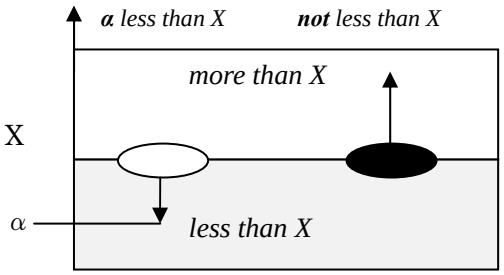
【図４：*not more than* のイメージ】



➔ *not more than X* は、*more than X* の否定なので、上の図（●と下向きの矢印）で表されるように、X以下の範囲をハイライトするイメージとなる。このイメージをさまざまに解釈することが可能なため、「X以下」「最大値X」「多くても／せいぜいX（=at most）」などの意味解釈が可能となる。

こちらは、差を表わす no とは違い、否定の意味を表わす not が用いられた表現である。(7)(a)は、*more than 10*（10 より多い）を否定しているので、10 以下となる。（*cf.* 図４）つまり、珈琲屋にいたお客さんの数は、10 人以下であるということである。そこから、最大 10 人、多くても 10 人、などのイメージが立ち上がる。

【図５：*not less than* のイメージ】

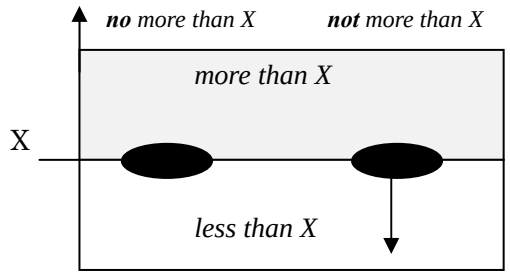


➔ *not less than X* は、*less than X* の否定なので、上の図（●と上向きの矢印）で表されるように、X以上の範囲をハイライトするイメージとなる。このイメージをさまざまに解釈することが可能なため、「X以上」「最小値 X」「少なくともX（=at least）」などの意味解釈が可能となる。

一方、(7)(b)は、*less than 10*（10 より少ない）を否定しているので、10 以上となる。（*cf.* 図５）つまり、珈琲屋にいたお客さんの数は、10 人以上だということである。そこから、最低 10 人、少なくとも 10 人はいたというイメージが立ち上がる。

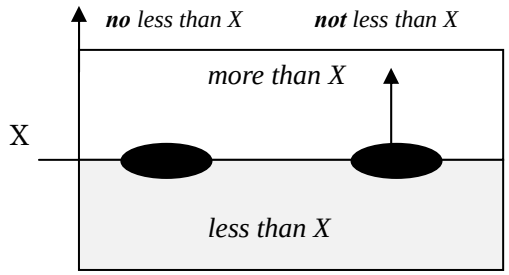
では、*no more than* と *not more than, no less than* と *not less than* の意味の違いはどのようなものかということが気になるかもしれないが、これは多くのネイティブスピーカーによれば、微妙な違いのようである。つまり、no more than X は、X よりも多いであろうという予測のフレームの中で、その数が X であるという点がハイライトされているのに対し、not more than X は、X 以下という点がハイライトされているという違いに過ぎない。（*cf.* 図６）no less than X, と not less than X についても同様であり、前者は、X

【図６：*no more than* と *not more than* のハイライトの違い】



➔どちらも *more than X* という表現を含むことから、X よりも多いであろうという perspective（図でハイライトされた部分）で事態をみているが、*no more than X* の場合は、実際は X の部分がハイライトされ、*not more than X* の場合は、実際は X 以下の部分も含めてハイライトされることから、*not more than* の方が、予想からの距離感が大きいため、予想外れのイメージがあると考えられる。

【図７：*no less than* と *not less than* のハイライトの違い】



➔どちらも *less than X* という表現を含むことから、X よりも少ないであろうという perspective（図でハイライトされた部分）で事態をみているが、*no less than X* の場合は、実際は X の部分がハイライトされ、*not lesse than X* の場合は、実際は X 以上の部分も含めてハイライトされることから、*not less than* の方が、予想からの距離感が大きいため、予想外れのイメージがあると考えられる。

よりも少ないであろうという予測のフレームの中で、その数が X であるという点がハイライトされているのに対し、後者では、X 以上という点がハイライトされた表現である。（*cf.* 図７）

以上の点に関しては、母語話者へのインタビューを行ったので、次の節で簡単に紹介し、検討する。

4. 母語話者への確認

母語話者[7]には、次の 2 つの点について確かめてみた。1 つ目は、*no more than* と *no less than* に関する perspective の違いからの説明方法が良いかどうかである。筆者の質問と母語話者の回答は次の通りであった。

1. Do you feel any difference in meaning between these two?

(a) *No more than 10 customers were at the coffee shop.*
(b) *No less than 10 customers were at the coffee shop.*

My understanding is: when you expected there would be more than 10 customers, you would use (a); In case you expected there would be less than 10, you would use (b). What would you think?

Native speaker's comment

Yes, I agree with your conclusions.

7 今回のメールでの調査に回答をいただいた母語話者の方は、Harry Wray 氏（U.S. 在住：日米関係論 PhD.）であった。また、Laurence Dryden 氏（大学教員：American Studies）にも同じ点に関して、ディスカションに協力頂いた。

10 名よりも多くの客さんがいると予想していて、実際は 10 人の場合には(a)が用いられ、10 名よりもお客さんの数が少ないと予想していて実際は 10 人の場合は(b)が用いられるのではないかという筆者の考えを提示して訊いたところ同意が得られた。

２つ目は、*no more than* と *not more than* の意味の違いについてである。筆者の質問と母語話者の回答は次の通りであった。

2. How about the following two? Do you feel any difference in meaning?

(a) *No more than 10 customers were at the coffee shop.*
(b) *Not more than 10 customers were at the coffee shop.*

Native speaker's comment

In the case of b, the speaker really strongly expected that there would be more customers. For that reason he or she was quite surprised--and maybe disappointed.

上の 2 つの文に意味の違いを感じるかどうかを訊いたところ、(b) *not more than* の場合は、話し手のお客さんが多いことに対する期待がより強いことが伺え、そのためにかなり驚いたり、場合によってはがっかりした可能性もあるというコメントをいただいた。

母語話者のこの回答から、*no more than 10* の場合は、お客さんの数が 10 であるのに対し、*not more than 10* の場合は 10 以下となるので、not の方が no の場合より、期待していた数より少ないイメージがでると考えられる。母語話者によっては、いずれも 10 しかないという意味であり、意味の差がないとコメントする人も多いが、今回の母語話者のコメントでは、*not more than* の方が、より期待外れの感じがあるということであった。この点は、*not more than* の方が、10 とイコールの部分だけでなく、10 以下の部分が、*no more than* よりもより前景化していると考えれば、筋が通るのではないか。

5. 英語学習支援で重要な点

上で述べてきたような説明は、これまでの英語教育の中でも類似したことが行われていると予想されるが、今回の説明で重要視したかった点は、訳語からの解放である。訳語に依存した形で、上記の説明をするのではなく、no や more than といった表現のイメージを理解するという視点から説明を試みることで、訳語から解放され、これらの言語表現がよりダイナミックに受信においても発信においても使えるようになることを目指したい。訳語を使って、上記の趣旨の説明をされている教え手が本小論を読めば、自分たちがやっていることと同じと捉えられがちであるが、訳語から解放された形で、訳さなくても英語のままイメージが捉えられるような学習支援の視点からの説明であるとご理解いただきたく思う。筆者は、英語が表わす内容を説明するために、日本語を用いて説明することは良いと思うが、訳語[8]は不要、それどころか、反

[8] なお、ここで言う訳語は、英文の内容理解の上に成り立つ翻訳のことではなく、英文の意味を理解する手段として、日本の英語教育で広く行われてきた文法訳読法（Grammar-Translation Method）における訳語のことである。関連して、訳読と翻訳のプロセスの違いについては、藤掛（1980: 4-13）で詳しく分析されている。藤掛(1980)によれば、訳読における日本文は英文の内容理解のための手段であるのに対し、翻訳における日本文は、英文の内容理解を前提とするゴールである。また、筆者は、翻訳という技能は、日本語と英語という２つの言語と文化に精通した人だけができる特殊技能であるため、中等学校英語教育で扱うことは適当でなく、通訳や翻訳家といった専門技能を身に付けたいものだけが行うべきことだと考えている。

って理解を妨げることさえあると考えている。

では、最後に、先ほども少々言及したが、受験英語の例文として挙げられているクジラ構文について、イメージから考えてみることでまとめとしたい。*A whale is no more a fish than a horse is.*という文では、上で述べたプロトタイプの文では、程度を表わす形容詞が置かれている位置に、a fish という名詞が置かれている。しかし、クジラ構文という構成体において、本来は形容詞が置かれる位置にあるので、「魚である度合い／魚らしさ」のように形容詞的な意味で解釈されると考えられる[9]。よって、この文のイメージは、「皆さんは、クジラの魚度合いは馬の魚度合いよりも高いと考えておられると思いますが、実は、その差はゼロなんですよ。」ということである。馬の魚度がゼロというのは、背景知識から誰しも得られることである。つまり、more X という形は、「Xの度合いがより高い」という意味と結び付いている。ここでは、通例、形容詞が置かれるXの位置に、a fish という名詞が置かれているが、構成体がもつ意味によって、ここでの a fish は「魚らしい度合い」のような形容詞的なイメージの解釈を受けると考えられる。また、than 以下には、than a horse is.という表現が置かれているが、これは、than a horse is (a fish) ということであり、馬の魚らしさという意味を表わす。ここで、馬は全然魚らしくないということ、つまり、馬の魚度合いがゼロであるというのは、この英語表現が表わしていることではなく、我々が持つ背景知識（フレーム知識）にアクセスした結果わかることである。

[9] 認知言語学の文法観では、言語表現はそのサイズと抽象度には違いがあっても、そこには形と意味の記号関係があると考える。つまり、ある形（音）は意味と対応するという考えである。この考え方は、Bolinger（1977: preface）の“one form for one meaning, and one meaning for one form.”つまり、形の数だけ意味はあるという考え方とも整合性がよい。認知言語学的な言語観は、それと言及されなくても、さまざまな人の言語観の中にもみられるのである。この形と意味の記号関係という立場に立てば、クジラ構文という構成体の中で、普通は、形容詞が置かれる位置に名詞が置かれれば、構成体の意味が作用して、その名詞は、形容詞的な意味解釈を受けると考えられる。

【参考文献】

Bolinger, D. (1977) *Meaning and Form.* London & New York: Longman.

Lee, D. (2001). *Cognitive Linguistics --- An Introduction.* Oxford: Oxford University Press.

Langacker, R. W. (2002). *Concept, Image, and Symbol - The Cognitive Basis of Grammar (Second Edition).* Berlin and New York: Mouton de Gruyter.

Langacker, R. (2008). Cognitive Grammar as a basis for language instruction.’ In P. Robinson and N.Ellis (eds.), *Handbook of Cognitive Linguistics and second language acquisition.* Routledge.

Littemore, J.（2009）*Applying Cognitive Linguistics to Second Language Learning and Teaching*. NewYork: Palgrave Macmillan.

今井隆夫（2010）『イメージで捉える感覚英文法 : 認知文法を参照した英語学習法』（開拓社言語文化選書 20）東京：開拓社

藤掛庄市（1980）『変革の英語教育』東京：学文社

山梨正明（2009）『認知構文論---文法のゲシュタルト性』東京：大修館書店